平成１５年度　学力向上フロンティアスクール事業中間報告

都道府県名	長 崎 県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	波 佐 見 町 立 中 央 小 学 校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	２	３	２	１	１４	２３
児童数	５６	４８	７３	６４	８１	５７	１	３８０	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力の定着向上をめざした学習指導のあり方
～きめ細かな個に応じた指導法の研究を通して～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

学　年	教　科	選 択 し た 理 由
１　年	算　数	子どもの理解度に差が出やすい教科であるため
２　年	算　数	子どもの理解度に差が出やすい教科であるため
３　年	算　数	子どもの理解度に差が出やすい教科であるため
４　年	算　数	子どもの理解度に差が出やすい教科であるため
５　年	算　数	子どもの理解度に差が出やすい教科であるため
６　年	算　数	子どもの理解度に差が出やすい教科であるため

その他、下記のような選択理由で研究授業を実施した学年・教科

学　年	教　科	選 択 し た 理 由
特殊学級	自主活動学習	「個に応じた学力」や「生きる力」を育成する基本的な内容であるため
４　年	理科(専科)	これまでの研究成果を他教科にも広げ、さらに研究を深めるため。(H16.2.25 予定)

(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ (1)育てたい児童像に即して、児童の実態を多面的に把握し、「学力」に関する課題を明らかにする。 (2)各教科の視点から、「基礎・基本」「確かな学力」とは何かを捉え直し、その向上のための教材・指導方法を研究する。 ○研究の見通し（仮説） ・確かな学力の定着向上をめざすために、きめ細やかな学習指導のあり方を研究し、実践、検証をくり返していくことで、確実に基礎・基本、確かな学力が定着し、「生きる力」を育むことができると考える。 ○研究の内容・方法 ・きめ細やかな学習指導のために、 ①個に応じた指導のための教材開発 →「ステップ」「ことばの広場」の時間の改善・充実、授業での活用法、授業での教材研究 ②個に応じた指導のための指導方法 →効果的なＴＴによる指導や効果的な少人数化指導の研究 指導体制の工夫改善の研究、習熟度別学習の方法や体制の研究 ③児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善 →評価規準の作成・改良、授業中の評価計画 指導案の中にも評価計画を書き入れる ④児童の実態の多様な面からの把握 →学力テスト、学習に対する意識調査、親子がんばりカード 上記調査等の分析と効果的な活用法の研究

平成15年度

○テーマ

(1)平成 14 年度の実践を多面的に評価し、課題を明らかにして、より有効で実態に即した具体策を立て、さらに充実させる。

(2)１年次の成果をまとめ、ホームページ等で公開し、本事業の普及に資するとともに、より有効な実践をめざすため、外部から示唆を得る。

※平成 14 年度の取り組みから、課題をより明確にし、その解決方法を具体化するために、平成 15 年度の研究の見通し(仮説)と研究の内容・方法(具体仮説)を下記のように設定した。

○研究の見通し（仮説）

・ＴＴ、少人数指導において、この学習スタイルや学習状況に応じて効果的な教材の開発や多様なグループ別学習、形成的な評価を生かした指導の工夫改善を行えば、個に応じたきめ細かな指導ができ、児童の確かな学力の定着や向上が図れるであろう。

○研究の内容・方法（具体仮説）

具体仮説	児童の実態を多面的に把握	効果的な教材の開発	多様なグループ編制	形成的な評価を生かす
内 容	理解や思考、習熟の速度やスタイル、興味関心、表現能力、学習意欲、生活習慣、根気などの児童の実態を多面的に把握することで、児童の確かな学力の定着や向上が図れるであろう。	興味関心や学習スタイル・速度、理解や習熟の程度に応じた教材を提示すれば、児童の確かな学力の定着や向上が図れるであろう。	児童の興味関心や学習スタイル、理解や習熟の程度に応じたグループ別学習をすれば、児童の確かな学力の定着や向上が図れるであろう。	単元の評価計画をもとに、授業の事前、導入、展開、終末の段階で指導と評価の一体化を図っていけば、児童の確かな学力の定着や向上が図れるであろう。
具体策	学力テスト 学習意識調査 親子がんばりｶｰﾄﾞ 上記の分析と活用法 レディネステスト プレテスト	ステップ ことばの広場 教材開発	ＴＴ 少人数化 習熟度別	評価規準作成改良 評価計画 振り返りカード ポストテスト

⇩ ⇩ ⇩ ⇩

低・中・高学年部会の仮説

平成16年度

○テーマ

(1)児童の「学力」に関する状況分析を行い、児童の実態から本事業の成果を評価する。

(2)３カ年の成果と課題をまとめ、冊子・ホームページ等によって公開するとともに、事業終了後も継続的な実践が可能となるように、次年度への基盤整備を行う。

○研究の見通し

・平成 16 年度のテーマに迫るために、これまでの取り組みを振り返って、さらに焦点を絞り、継続して実践・検証をくり返していくことで、確実に基礎・基本、確かな学力が定着し、「生きる力」を育むことができると考える。
また、これまで中心としてきた算数科の学習研究の成果を他教科へ広める。

○研究の内容・方法（具体仮説）

・児童の実態を多面的に把握
学力テスト・学習意識調査・親子がんばりカード
上記の分析と活用法・レディネステスト・プレテスト

・効果的な教材の開発
ステップ・ことばの広場・教材開発

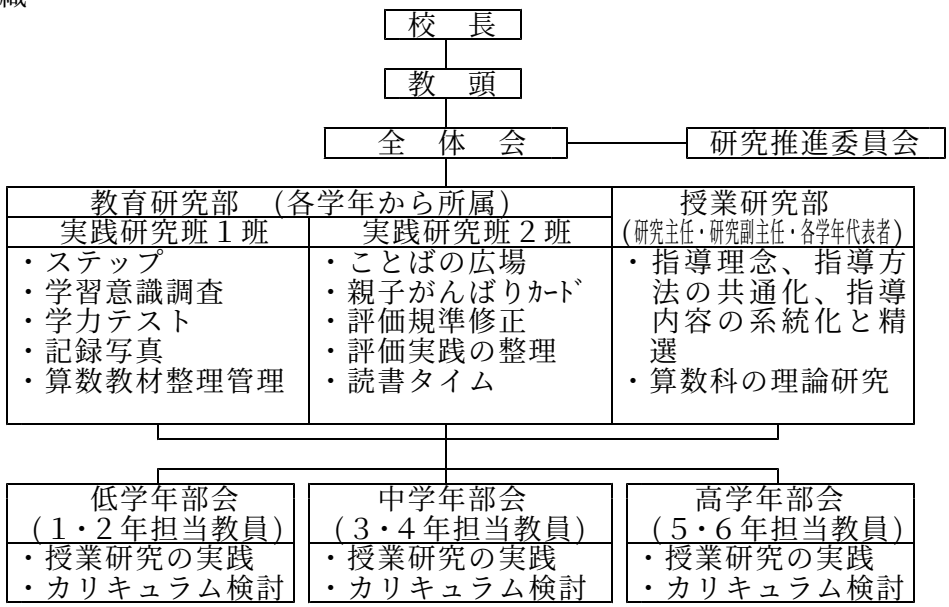
・多様なグループ編制
ＴＴ・少人数化・習熟度別

・形成的な評価を生かす
評価規準作成改良・評価計画・振り返りカード
ポストテスト

⇨ 低・中・高学年部会の仮説

(3)　研究推進体制

○研究組織



※研究推進委員会構成メンバー
　　(校長・教頭・教務主任・研究主任・研究副主任・各学年代表者)
※平成１４年度の反省から、新たに授業研究部を設立した。これは効率よく研究理論を深めたり、研究授業の指導案検討をしたりするために設置した。そのため、実践研究班を昨年の３つの班から２つの班に統合した。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

(１)研究授業考察

〔１年算数科授業考察〕

〈具体的な実践〉

○レディネステスト、プレテストを行い児童の習熟の様子を確かめ授業に臨んだ。それをもとに、２段階の習熟度のグループを作り、きめ細かな指導ができるように、学習ゲームをＴＴの形態で行なった。

○数の合成分解を低位の児童にも理解しやすくする為にブロックを使い、視覚的に確認させた。

○日常生活に活用できるように、数の合成分解の大切さやよさに気づくようなゲームを学習に取り入れ、数についての豊かな感覚を養わせるよう工夫した。

○ミニステップでは、ドリル的な学習を個人の速さで、意欲を持って進められるようにした。

○ミニステップの時間を使って、つまずきのある児童の個別指導にあたった。

〈実践の成果〉

○ゲームを通じて学習意欲を高めることができた。

○学習ゲームを習熟度のグループで行なった結果、低位の児童も発表のチャンスがふえ、集中して学習に取り組むことが出来た。

○ミニステップは、ほんの少しずつ難しくなっていくように作っていき、子供たちが「できた。」「もっとやりたい。」と意欲的にドリル学習ができた。また、「計算が上手になった。」と一人一人が自信を持って取り組むようになった。

〈今後の課題〉

○同一教室内で２グループに分かれ、それぞれで学習ゲームを行なったので声が聞き取りにくくなりやりにくかった。

○振り返りカードなどを利用して、自分の学習の仕方や、学習への参加の様子など自己評価ができるようにしていきたい。

○ミニステップの解答を自己採点させたが、誤答のチェックを教師でできるようにしたい。遅れている児童の個別指導もしていきたい。２人しか教師はいないので、どちらかを優先するようになってしまう。

〔２年算数科授業考察〕
＜児童の様子＞
・一人ひとりが意欲的に活動していた。授業後の反省にもほとんどの子が楽しかったという感想を書いていた。
・発表の時、自分達の考えをうまく話すことができなかった。

＜教師の働きかけ＞
・子ども達の工夫した数え方は、もっといろんなケースを想定しておくべきだった。
・学習課題を明確に把握（はやく、わかりやすく）させるよう、工夫するべきだった。
・子ども達が発表する際の支援の仕方が充分に研究できていなかった。
・前半のまとめで、子ども達の意見の中から『１００のまとまりを作ったら分かりやすい』という考えを導くことができなかった。

＜授業の設定＞
・話し合いの時間が少なく、充分に考えがまとまらないうちに道具を取りに行っていた。

○実践の成果
<児童の様子＞
・授業全体を通して活気にあふれ、子ども達が生き生きと取り組んでいた。
・話を聞く態度がよったので、学年での一斉学習も充分に効果をあげていた。
・一人の友だちの考えに流されず、話し合って決めている班が多く見られ、子ども達の中に友だちを尊重する姿勢や学習課題を自分のものとしてとらえる姿勢が感じ取られた。
・算数の楽しさやよさを子どもたちが感じ取っていた。

＜教師の働きかけ＞
・導入の段階から、教師の問いかけや教材に子ども達の興味を高める工夫がなされていた。
・発表の時、教師が後ろでアドバイスをしたので、子ども達ははずかしがらずに話すことができた。
・結果の発表の時、代表的な活動のみをピックアップしてあったので、理解しやすかった。

＜授業の設定＞
・多様な数え方を見つけだし、それを発表する場面があってよかった。
・卵パックの数が少なかったのがかえってよかった。数が少なかったことによって、カップを使ったり、１０枚ずつ積み上げたりと多様な方法を見つけだすことにつながっていた。
・全体を３グループに分けることで、教師１人当たりの担当が１６人に減り、充分に目が行き届いていた。声かけも容易にできていた。
・実際にお金を使って数えることで、身近な学習として取り組むことができた。
・総合の研究授業では、2 時間続きの計画が多数あったが、今回、算数の授業でも 2 時間の計画がされていて、指導計画を柔軟に考えるための参考になった。

＜機器の活用、教具の工夫＞
・卵パックを活用することで、１０の１０こ分を無意識に抵抗なく理解できていた。
・映像（プロジェクター、スクリーン）の活用が効果的だった。
○課題点
・位取りの際、容器を分けて表現する方法も提示してみるとよかったのではないか。
・模造紙に１００のまとまりで分けたことを上手に表していたグループがあったので、それを「より良い数え方がないかの」の発問の後にスクリーンに映したらひと目で分かったと思う。

〔３年算数科授業考察〕
〈具体的な実践〉
①個に応じた指導のための教材開発
・思考の多様化を目指した道具作り。
・児童に興味を持たせる導入。
・児童の実態にあわせたワークシートやステップ学習。
②個に応じた指導のための指導方法
・学年を習熟度別に２クラスに分け、教師との関わりを多く持たせるためのコースにはＴＴを、自分たちの発見を重視したコースには教師一人をおいた指導。

〈実践の成果〉
・習熟度別に分けたことにより、しっかりコースでは，Ｔ２による重点的な個別指導を行うことができた。また、ひらめきコースにおいても、発表活動を通して個々の意欲を高めることができた。
・児童の中から、わり算に対しての理解の声や、意欲・関心を持った感想が聞か

れた。
・それぞれのクラスにおいて、教師の意図する、子どもたちの考えをひきだすことができた。

〈今後の課題〉
・ノートの整理の仕方やワークシートを使った学習におけるまとめ方の訓練。
・習熟度別を２コースに分けることにより、人数が増えたコースがあったが、少人数クラスにしたほうが、効果的ではないかについての検証。
・コースの中にも出てくるであろう個人差についての対応の仕方。
・児童の活動の時間、一斉指導、補充問題等の１単位時間のなかでの有効な使い方。
・聞く、書く、話す等の現学年段階での身に付けさせかた。

〔４**年算数科授業考察**〕
億や兆の「大きな数」の学習を「きめこまやかな学習指導のための個に応じた指導」ということを意識し、習熟度別コースを設定した。具体的には、２クラスを解いて担任と TT 教諭の３人であたる授業の計画を立て実践した。

＜具体的な実践＞
○年度当初５月の上旬の授業であったため、児童の１年時から３年時までの、数と計算領域に関する診断テスト（関・意・態を除く３観点）や行うことにより、児童の実態や能力をきめ細かく把握した。
○レディネステスト・プレテストで個人・全体の本単元の学習内容に対する考え方や思考の度合いを確かめ、このテストをもとに自己評価させながらコース選択を行った。その際どのコースに行けば「できた・わかった」という喜びが得られるかを最優先に考えさせながら自己選択を行わせた。
○単元に入る前にオリエンテーションや試しの活動を取り入れ、差別や偏見意識をもたせないように配慮した。児童が学習の流れをつかんだり、自分にあった学習スタイルのやり方を確認したりしていった。
○それぞれのコースのレベルにあったステップ問題、補充問題を作成し、定着の度合いを確認しながら取り組ませた。たしかめコースでは、一つ一つのやり方を確かめながら、主に基礎的な内容の定着を図った。しっかりコースでは、友だちとの話し合い教え合いを組み込みながら、やり方考え方を意見交換させて理解を深めていった。広がりコースでは、発展的な内容を学習するが、必要に応じてヒントコーナーや位取り表の活用などの助言を行って取り組ませた。
○振り返りカードで、毎時間の学習を振り返らせつまずきを把握し、次時における活動の参考とした。児童の励みになり、学習のめあてにつながるようなコメントを返した。
○年度当初時間割を作成する際、週１時間、担任は専科の時間を合わせ TT は空き時間をこの時間に合わせて取り、TT と担任の打ち合わせの時間の確保に努めた。

＜実践の成果＞
○各コースの児童とも、自分で自分に合う学習スタイルを選んでいるためどの児童も意欲的に取り組んでいた。算数コーナーに３コースの学習内容を掲示したので他のコースのことがわかり、安心して学習できた。
○たしかめコースでは能力別の位取り表を使い、理解が深まった。しっかりコースではペア学習をさせたが、自信がつき、よく考えを発表した。広がりコースの児童が兆よりも大きな位を知ると、他のコースの児童に教え合う姿が見られた。
○自分に合った学習スタイルを選ぶことの良さを味わうことができた。
○指導者同士の連携を取っていくために、週１時間打ち合わせの時間がとれたことは、とてもよかった。

＜今後の課題＞
○低位の子どもたちを「読める」から「読んで書ける」までさせていくためには、学習指導要領と教科書を見比べて、余裕を持った指導計画を考える必要がある。
○形成的評価を指導に生かすための手だてを工夫したい。
○億や兆という数が日常生活の中で取り上げられる事が少ないため、日頃の生活の中で算数の感覚を育てると言う意味で、課題提示の仕方も視覚を使った提示の工夫や、より身近にとらえられる問題の工夫などももっと考えていかなければならないと感じた。

〔５**年算数科授業考察**〕
本単元の指導に当たっては，本校の研究仮説を受けて「きめ細かな学習指導のための個に応じた指導」ということを意識し，授業の計画を立て実践した。

〈具体的な実践〉
○児童の学習ノート，算数に対するアンケートなどで児童の算数に対する意識や学び方を把握した。
○レディネステスト，プレテストで個人・全体の本単元の学習内容に対する考え方や思考の度合いを確かめた。
○単元に入る前にオリエンテーションや試しの活動を取り入れ自分で自分に合う学び方を判断させた。
○それぞれの児童に事前に選択・学習の進み方で分かれる「習熟度別学習」を学級の枠をはずして，学年で取り組んだ。（じっくりコース，しっかりコース，どんどんコース）
○じっくりコースでは，Ｔ１が全体指導，Ｔ４が個別指導として入る形で学習を進めた。
○ワークシートやステップ問題，補充問題などを活用し児童の思考を助けたり，深めたりした。
○授業の途中や最後に自己評価，ポストテスト，ノートでの評価，観察評価などを取り入れ形成的に評価をすることで，定着の度合いを確認し理解が遅い子にはヒントコーナーやヒントカードを活用させたり補充問題に取り組ませた。また，理解が速い子にはステップ的な発展問題に取り組ませた。
○振り返りカードで毎時間の学習を振り返らせた。

〈実践の成果〉
○事前のテストやアンケートなどで多様な面からの実態把握を細かく行うことで児童の実態に合った指導計画を立てることができた。
○オリエンテーションや試しの活動をすることで子どもたちが学習の流れをつかんだり自分に合った学習スタイルで学習できた。
○コース別学習を行うことでその子に合った思考方法で学習でき理解もしやすく楽しく学習に取り組む子が多かった。また，同じレベルの子が集まるためその子たちに合ったスピードや方法で指導でき，細かいところまで指導できた。
○形成的な評価を行って指導したのでそれぞれのつまずきが把握でき，その後の助言や指導が細かくできた。
○振り返りカードを書かせることで子どもたちに自分の取り組みを意識させることができたとともに，子どもの授業での思いを知ることができた。
○「わかった」「できた」「楽勝」等々子どもたちの喜びの声を聞くことができた。
○算数学習に対する意欲の高まりが見られた。

〈今後の課題〉
○指導者同士の連携を取っていくためには，打ち合わせをもっと密にしていく必要を感じた。そのためにも時間の確保をどうするかが大きな課題である。
○習熟度別の指導など余裕を持った指導を行うためには，学習指導要領と教科書を見比べて，力を入れるところを考えた単元構成を行う必要がある。
○評価と指導の一体化のために，更に効果的な評価の方法を研究する必要がある。
○個人の学力の変容を客観的，具体的に把握する方法を更に研究し，取り組みの成果や課題を数値化，データ化できればと考えている。

〔６年算数科授業考察〕
〈具体的な実践〉
○レディネステスト，プレテストで個人・全体の本単元の学習内容に対する考え方や思考の度合いを確かめた。
○単元に入る前にオリエンテーションや試しの活動を取り入れ自分で自分に合う学び方を判断させた。
○「分数の大きさ」を学習する段階では，学級の枠をはずして選択コース別（チャレンジコース，じっくりコース１，じっくりコース２）に授業を行い，「分数のたし算，ひき算」を学習する段階では習熟度別で授業を行った。
○習熟度別では，３コースに分かれた。理解の遅い児童（５名ほど）をＴ３が指導し，理解の速い児童は自分たちでグループ学習をおこない，それ以外の児童をＴ２・Ｔ３が指導した。
○ワークシートやステップ問題などを活用し児童の思考を助けたり，深めたりした。
○授業の途中や最後にポストテストやノートでの評価，観察評価を行い定着の度合いを確認した。
○振り返りカードで毎時間の学習を振り返らせた。

〈実践の成果〉
○事前のテストで実態把握を行い児童の実態にあった指導計画を立てることができた。

○オリエンテーションや試しの活動をすることで，子供たちが学習の流れをつかんだり自分にあった学習スタイルで取り組むことができた。
○習熟度別では，それぞれのコースにあった方法やスピードで指導をすることができたし，ノートの点検することで，グループ学習の子供たちの把握と指導ができた。
○ステップ学習に意欲的に取り組むことができた。
○振り返りカードを書かせることで，子供たちに授業への関心を持たせることができ，また，授業への思いを知ることができた。

〈今後の課題〉
○指導者同士の連携を取るためには，打ち合わせをもっとしていく必要を感じた。そのためにも時間の確保をどうするかが問題である。
○児童の希望を考慮して選択コース別の授業を組んでみたが，コースの中身と実力がかみ合わない児童が数名いた。コースを選択するときには，意欲だけではだめだということがわかったので今後に生かしたい。
○学級をばらしてコースを組む際，学習規律などが違うので統一しておく必要を感じた。
○児童の積極的な発言や活動を引き出せるように今後は授業の展開を考えていきたい。
○児童の思考や授業の流れが振り返ることができるように，ノートの使い方を指導していく必要がある。

〔ひまわり学級**授業考察**〕
本学級は、算数という教科の授業を行っていないので、国語科の授業を実施した。教科としては、算数科として行っていないが、教科領域を合わせた学習の中で、数や言葉を扱った題材に取り組んでいる。
本単元の指導に当たっては、本校の研究仮説を受けて「きめ細かな学習指導のための個に応じた指導」ということを意識し、授業の計画を立て実践した。

＜具体的な実践＞
○本単元は５時間の指導計画であるが、日常生活の中で新しく来られた先生方と触れ合う機会を意図的に作り、年間を通して継続的に関わりを持てるようにしている。
○本児はまだ言葉の習得ができていないので、担任が話しかけてうなずくことが多い。担任が言葉かけをあまりしすぎてしまい、本児の発語のチャンスをなくしてしまっていないか心配であったが、本時では、歌や発語の時、担任の口形を真似て発音しようとする姿が見られた。
○４５分間の授業で、歌を歌ったり体を動かしてまねっこ運動をしたりして、教科と領域を合わせた学習をした。本児の発達段階に合わせた感覚、統合的な学習を遊び学習の中で取り組ませている。

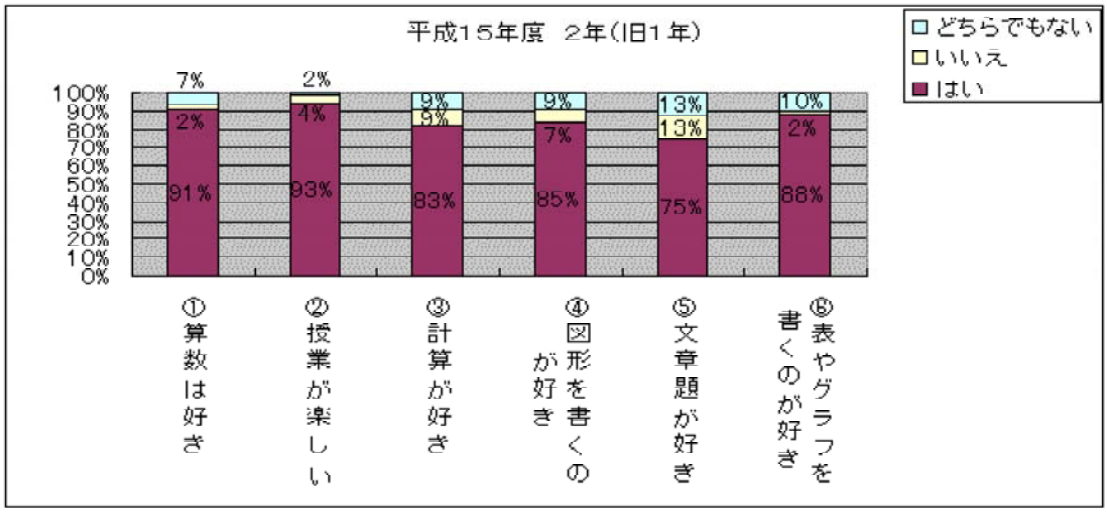
＜実践の成果＞
○本児は、人との関わりを好む性格で、誰に対しても近づいていくので、新しく来られた先生方８人のうち、すでに４人の先生は認識できていた。これは、日頃から先生方が廊下やワークスペースで声をかけてくださってることの積み重ねだと思う。
○家庭や病院との協力があり、本児の脚力を中心として体力がついてきている。今後は、活動範囲や活動内容もひろがっていくであろう。

＜今後の課題＞
○本学級は児童１名なので、できるだけ集団の中で学習する機会を多く持ちたい。集団学習を経験させ、他の児童と共に学び合い、社会性を養う好ましい人間関係を作る場を設定していく。
○同学年だけでなく他学年や他校の児童、生徒さらには、地域の人々と触れ合う機会を設け、本児を理解してもらい、共に生きる社会になってほしい。
○経験することが、本児にとって生きる力を培うことになる。そこで、直接的な経験を多くさせ、その場に応じて行動できるように学習の場を設定していく。
○体験活動を多く取り入れ、実際に体験することで社会性を養い、将来自立につながるような題材を選択していきたい。
○特別支援学級の取り組みについて、職員間で話し合う時間が十分取れていないのが現状である。個人研究で終わらないためにも、より多くの職員と検討し合う時間の確保が今後の課題の一つである。

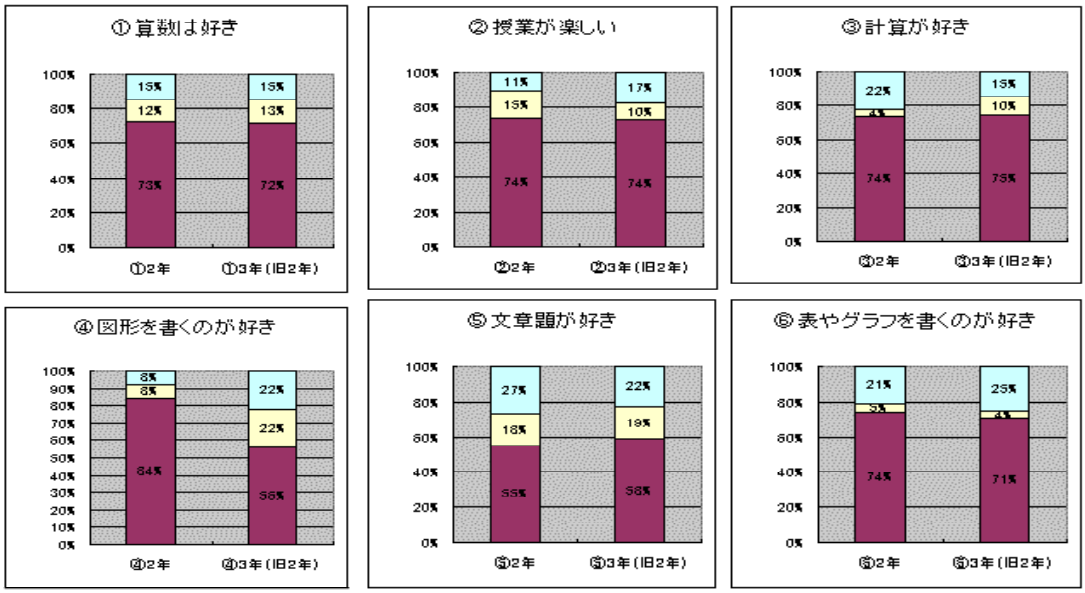
(２)研究実践１班の取り組み(実践と考察)

①学習意識調査

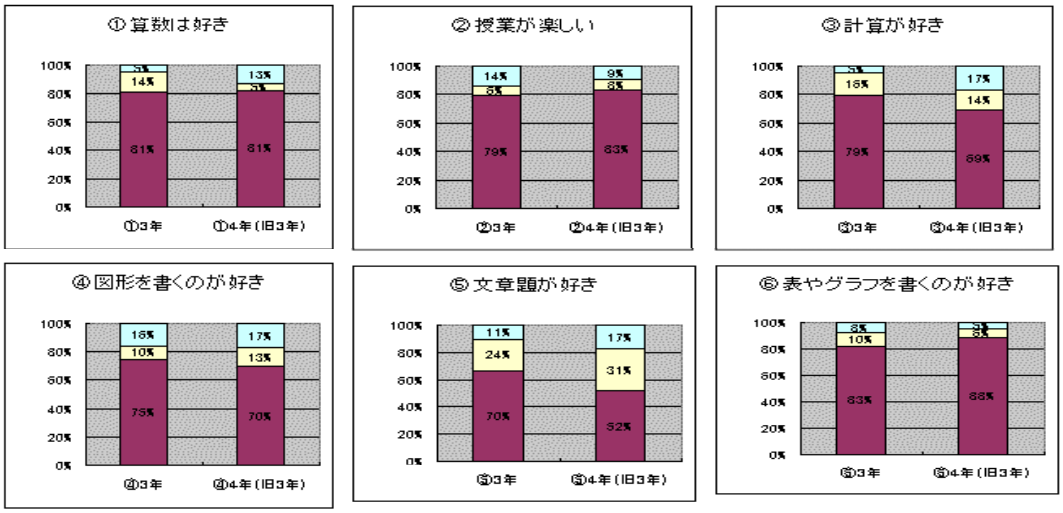
２年生



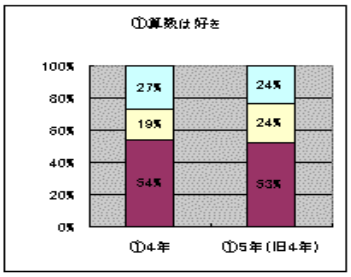
３年生

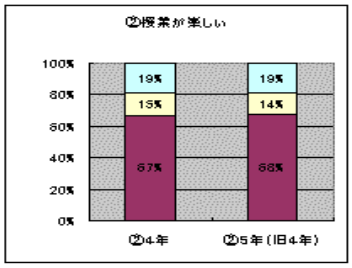


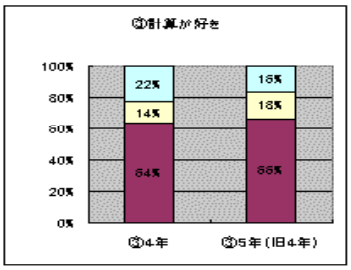
４年生

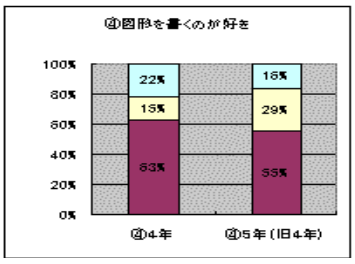


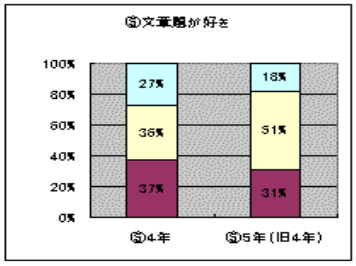
５年生

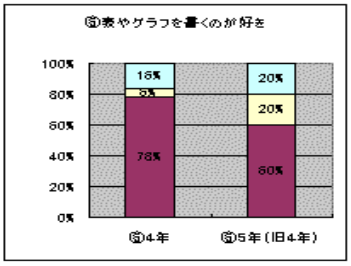




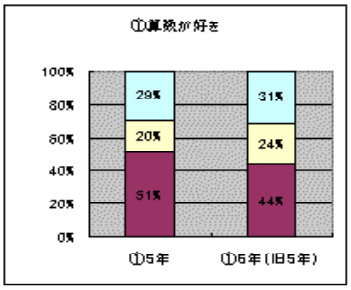


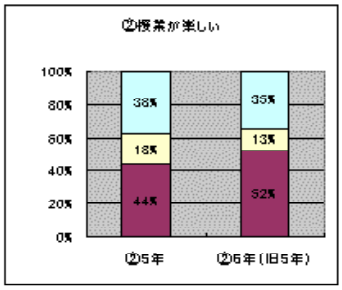


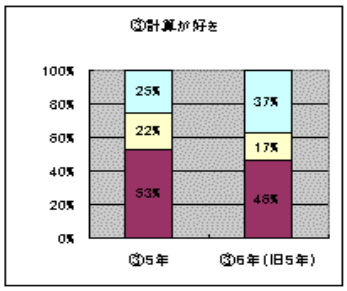


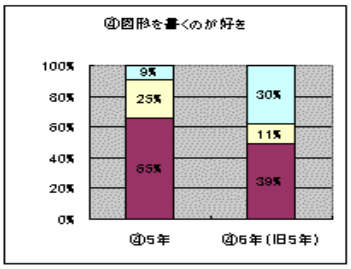


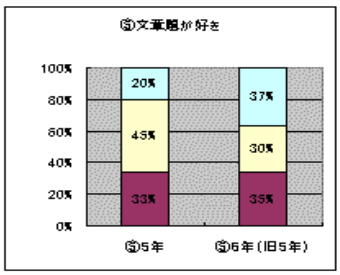
６年生

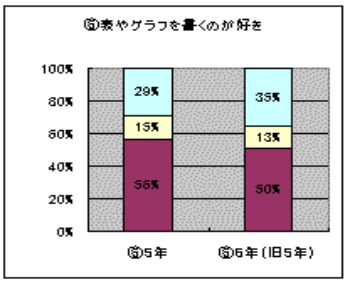












〈考察〉

・「算数が好きか」の問いに関して，２～４年は「はい」が多く，高学年ほど減っている。
・「授業が楽しいか」の問いに関して，半数以上の児童が「はい」と答えている。「いいえ」と答えている児童が学年に１割近くいるので，今後も授業を改善していく必要がある。
・全体的に表やグラフを書いたり，計算したりすることを好むが，図形を描いたり，文章題をといたりすることは好まない傾向にある。
・高学年の児童は，練習問題をとくことは好きだが，新しい単元を学習することに抵抗がある。今習っている授業内容に慣れてくると楽しく学習できるということだろう。
・どの学年も発表することを苦手としており，表現力不足を克服するためにも，今後は発表の仕方の指導なども必要になってくる。
・人から教えてもらうより，自分で解けたとき・分かったときにやる気が出ている。また，どうにかしてとこうとする意欲があるので，授業作りの工夫を行うことで，児童に満足感を与えることができるであろう。
・低学年は，教師から教えてもらうことを好み，高学年になるにしたがって，友達から教えてもらって問題をとくことを好む傾向がある。高学年になると，友達とのつながりが深くなってくるし，互いに教え合う力も向上しているのではないかと考える。

②ステップ学習の運営

〈ねらい〉

1・計算の能力の向上

算数科『数と計算』の領域を中心に、計算の能力を高める。

2・自主学習

自分の学習は自らの力で進めていくという意識をもたせる。

3・個への対応

基礎的内容に焦点をあて、個々のつまづきに対応した支援を行う。

〈指導体制〉

1・全職員の協業

・学級担任＋専科で各学年の指導に当たる。校長、教頭は図書室前での指導に当たる。

2・学習の進度を比較しない

・個人差に応じた学習なので、学習の進み具合を他の児童と比較しない。また、比較させない。

3・認め、励まし

・意欲と喜びをもって取り組めるよう、適切な指導に努める。

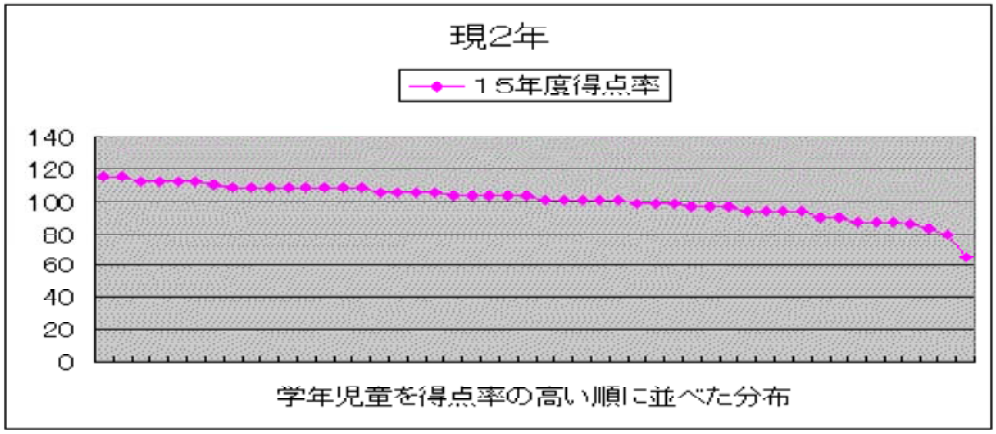
〈成果と課題〉

・個人の学習の補充や発展学習を行わせることができ，個人の習熟度の把握と個別の指導に取り組めている。

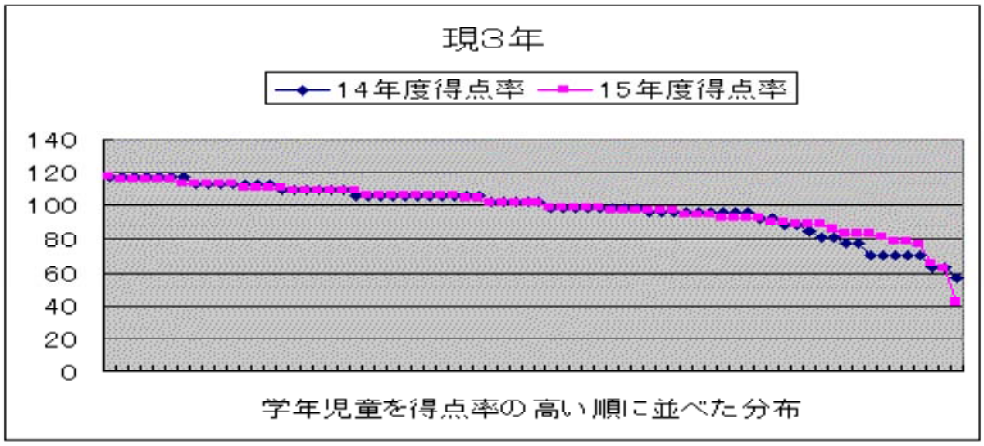
・ねらいや指導体制をさらに徹底させ、これまで以上に効果を上げたい。

③学力テストの分析

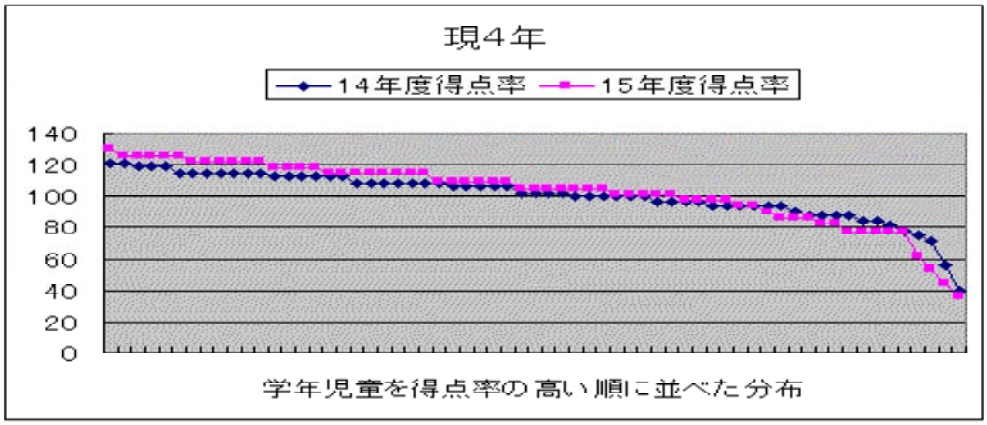
〈昨年度と今年度の比較における『数と計算領域』についての各学年ごとの考察〉



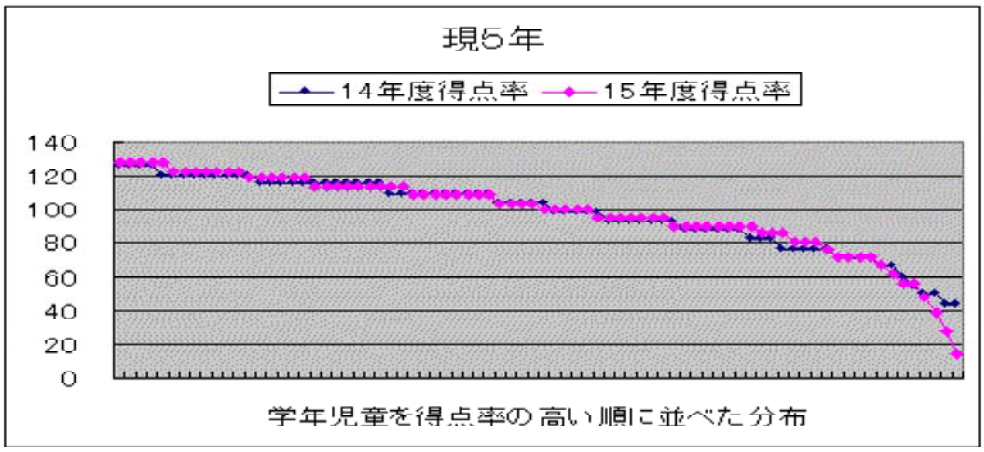
○得点率１００以上は学年全体のおよそ７割に達しており，ほぼ満足のいく習熟度になっている。



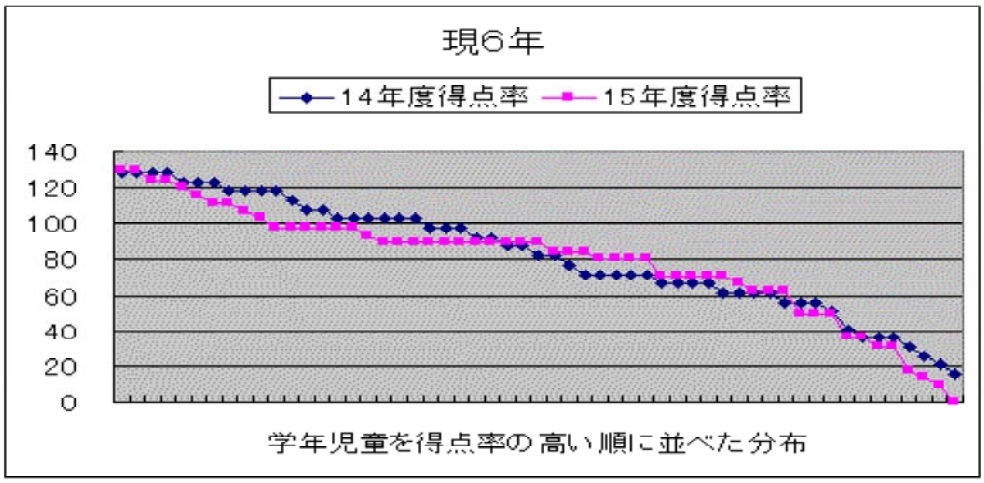
○学年の傾向として上位から中位の児童は昨年度並みか，または昨年度を若干上回っている。一方，下位の児童は昨年度と比較するとその伸びが顕著であり，研究・実践の成果であると考えられる。



○学年の傾向として上位から中位の児童は昨年度よりも伸びている。一方，下位の児童は学習が難解になり始めているのか昨年度と比較すると下回っている。



○学年の傾向として昨年度並みか，または昨年度を若干上回っている。しかし，下位の児童は学習の難解さのためか，昨年度と比較すると下回っている。



○学年の傾向として，中位の児童は昨年度と比較すると伸びているようである。しかし，上位および下位の児童は昨年度と比較すると下回っている。

〈数と計算領域における考察〉

○２・３・４年生では，学校の授業中だけでも十分にやっていけるのだが，５年・６年になるにつれて，学校での授業に加え家庭学習にも力を入れないとなかなか『自分の力』として身に付いていないのが実状のようである。

○思考力や表現力を高めるために，日々の算数の授業の中で『考える時間・思考力を養う時間』を十分に取るようにしたり，自分なりの方法で考えを表現したりする場面を数多く設定することが必要である。
○得点率の低い児童は，昨年度と比べて伸びているように見えない。前学年の学習内容が十分理解できていないうえに，学年が進むにつれその内容が難しくなってきているためだと思われる。この児童たちを伸ばす手だてを考え，工夫していかなくてはならない。

〈今後の課題〉
○『数と計算領域』は，研究してきた成果が現れてきて全国レベルへ到達できているようである。これからは『数と計算領域』だけでなく，『量と測定』・『図形』・『数量関係』の各領域においても児童の実態に応じた研究・実践を進めていかなければならないと考える。

(３)研究実践２班の取り組み(実践と考察)
①**「ことばの広場」の運営**
【目　標】
・漢字や言葉への興味を深め，進んで漢字や言葉の習得に努めようとする心情を培う。
・既習漢字や言葉の段階的練習により，既習漢字や言葉の習熟を図る。
・自己の課題に向かって，意欲的に取り組む態度を育成する。
【成果と反省】
・はねや払いに気を付けて，一字一字丁寧に書くようになった。
・個人差があり，早く進める子とそうでない子がいたが，ドリル学習・宿題・家庭学習と連携させて定着を図るようにした。また，下位の子どもには，解答をわたして練習するところから始めさせた。
・作文・日記指導の中で，既習漢字を使うよう指導するとともに，自分で，子ども同士で，担任と一緒にと，ていねいな見直しをする中で，文章の中で使いこなす力が身に付いてきた。
・チェックカードやがんばりカード，がんばりシールの活用により，子どもの意欲が高まった。
【課　題】
・十分に時間がとれず，他の時間を利用して取り組むこともあった。子ども達の意欲は高まっているので，習慣化・力の定着のために時間の確保が必要である。
・正確に書き，正確に自己採点できる力のさらなる育成。

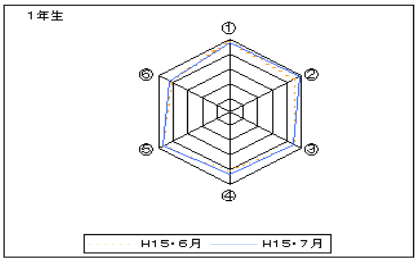
②「朝の読書タイム」の取り組み
【目　的】
読書の習慣を身に付け，読む力，物事を考える力，集中する力をつける。
【 成果と今後の課題 】
・読書タイムの朝は，時間前からほとんどの子が本を読み始めている。本を読むことに興味を持つ子が増えてきた。今後も，継続することが大切だと思う。
・教師も一緒に本を読むようになったことで，図書室の本の貸し出し数が増えた。
・読んでいるときは，静かに，集中できる時間も長くなりつつあるようだ。
・低学年は，自力で読めない子もいたので，読み聞かせと半々くらい行ったところ本に対する関心が高まった。
・担任として読ませたい本の紹介などもしていきたい。そのために，図書室にどのような本がどれくらいあるのかをもっと把握していきたい。
・読書をしやすいように図書をできるだけ増やしていきたい。名作など，少し長編のものにもチャレンジしていく子を増やしたい。
・本好きな子が何人かでてきて，休み時間にも読んでいる様子が見られるようになった。
・本校は，教室環境がオープンスペースということで，一日の生活の中に音のない静かな時間をつくることにも努力している。朝の読書の時間は，全校一斉に取り組むことで，みんなで作り出す静かな時間は，気分転換にもなっている。

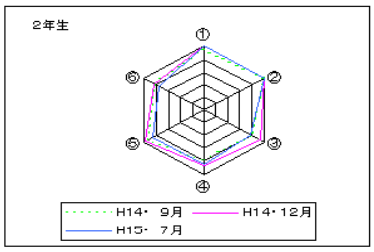
③**「親子がんばりカード」の取り組み**
【目　標】
・一週間毎日，親子がんばりカードを見ながらチェックすることにより，生活の問題点に気づき改善していこうという積極的な姿勢を培う。
・親子がんばりカードの継続により，基本的な生活習慣の定着を図ると共に自立心

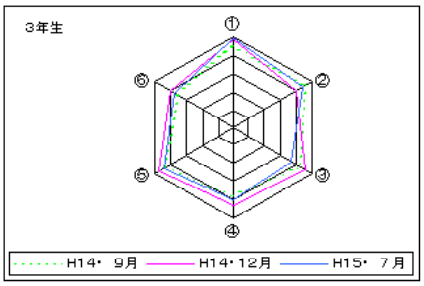
の育成を図る。

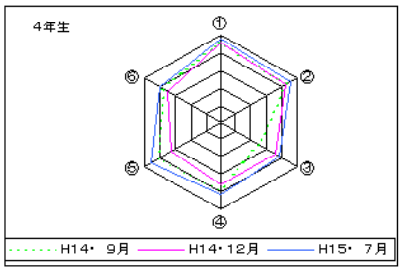
項目番号	項　　目　　内　　容
①	きちんと朝食をとる
②	元気よく「行ってきます」と言って，家を出る
③	決まった時間に勉強する
④	翌日の準備をしてから寝る
⑤	あいさつ（おやすみ・いただきます）や返事がきちんとできる
⑥	名札をつけ，いつもハンカチ・ちり紙を持っている

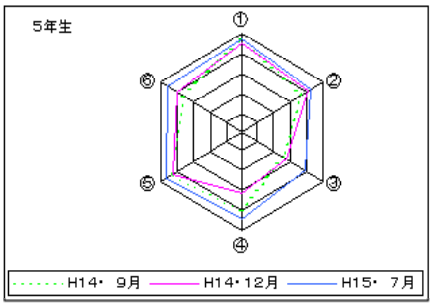
○カード集計結果(平成１４年度・平成１５年度)

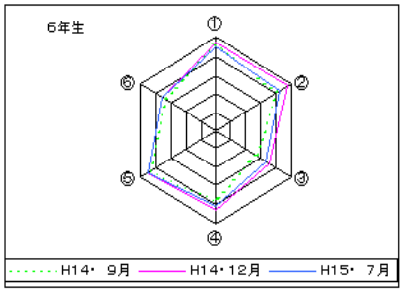












【成　果】
- カードに記入することで，生活の見直しができ，児童も○を増やしたい一心で心がけるようになった。親にも子にもいい意識づけになっている。
- 毎日帰ったらすぐ宿題をするので手がかからず，親としては大変助かっているという声が多く聞かれた。
- 家庭での手伝いを決めて，責任をもってしている子が増えた。家族の一員としての自覚が少しずつ芽生えているようだ。
- 親が持ち物の点検をしてくれるようになり，そのせいか，机の上や中の整頓もよくなってきたようだ。

【課　題】
- 学年差はあるものの，様々な家庭環境の子どもがおり，自分の努力で向上できることと家庭の協力なくして成り立たないことがある。
- 結果の集計には大変時間がかかること。また，データを効果的に活用するにはどのようにすればいいか。
- 子どもや親の意識を高め，生活のリズムを定着させるにはどのような手立てをするといいか。

２．今後の課題

研究の仮説に沿った今後の課題

《児童の実態の多面的な把握》

●学力テストの結果をもとに更に考察を深め，本校の児童のつまずきの傾向を明らかにしたり，そのつまずきに対応していけるような具体的な，全学年を通した指導計

画を作成するなど，更に個に応じた指導が必要である。
●実態把握をもとにそれまでの理解が不十分な児童に対して，単元に入る前の個別の指導の時間の確保。
●基本的生活習慣を身に付けさせるためや家庭学習の習慣化などの面でより一層，家庭との連携を図っていく必要がある。

《効果的な教材の開発》
●ステップなどに毎週取り組ませているが，短時間であるため，どうしても全児童に対応できない面がある。
●ワークシートなどを作成して指導を行っているが，一問一答式になったり，単なる穴埋め式になったりしている面があるため，児童の思考が広がるような工夫・改善をする必要がある。
●基本的生活習慣を身に付けさせるためや家庭学習の習慣化などの面でより一層，家庭との連携を図っていく必要がある。

《多様なグループ編成》
●複数の指導者で指導を行うので打ち合わせの時間が必要で，その時間確保が大きな問題となっている。
●今後も様々なパターンの形態で授業を進め，学習の内容にあった学習形態を明らかにすることで更に効果が上がると考える。
●サポートティーチャーの積極的な活用と，より効果的な活用方法についての研究も本校の実態に照らし合わせて考えていく必要がある。

《形成的な評価を生かす》
●１単位の授業の中において，指導をしながらの評価をどのようにしていくか更に研究を進める必要がある。
●観察やノートなどによる評価を行う場合にその評価にどのように客観性を持たせていくか。
●場面場面での評価はよくなってきているが，一単元を通した評価方法の確立と共通理解を行い，通知表や指導要録に結びつく評価のあり方について更に検討する必要がある。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

①学習意識調査
○目的
・学習に関わる意識の面で児童の実態を，できる限り客観的に，正確に把握し，今後の学習に生かしていくために実施する。
○実施内容
・アンケート用紙(質問事項等、集計結果はＰ　参照)に児童自ら記入させ，集計・考察を行い，学習に生かす。
○実施時期
・学期に一回実施。

②学力テスト
○目的
・児童の学力の現状を確認するための客観的な資料の一つとして実施し，その結果を分析し，今後の学習に生かしていく。
○実施内容
・２年生以上，国語・算数の教科
（教研式「新 CRT-Ⅲ」新観点別到達度学力検査)
・指導要録に示された観点の分け方に準拠し、国語・算数のペーパーテストに適する観点についてテスト化し、「関心・意欲・態度」の観点については質問紙法による児童の自己診断法を採用している。
○実施時期
・年１回(本年度は６月実施)

③親子がんばりカード
○目的
・一週間毎日，親子がんばりカードを見ながらチェックすることにより，生活の問題点に気づき改善していこうという積極的な姿勢を培う。親子がんばりカードの継続により，基本的な生活習慣の定着を図ると共に自立心の育成を図る。

○実施内容
・親子がんばりカード(質問事項等、集計結果はＰ　参照)に児童と保護者が一緒に記入し，集計・考察を行い，学習指導の土台である基本的生活習慣の定着をめざす。
○実施時期
・月１回，１週間継続

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

①研究会、説明会等の開催実績及び開催予定（日時、場所、対象、会の目的等）
(１)平成１５年度の研究発表会の開催実績
期　　日　　平成１５年１１月　５日（水）
場　　所　　波佐見町立中央小学校
テ ー マ　　「確かな学力の定着向上を目指した学習指導のあり方」
対　　象　　すべての教職員
内　　容　　・公開(ｽﾃｯﾌﾟ学習)（全学級）
・公開授業【習熟度別学習を取り入れた学習形態を中心として】
算数科(１～６年)，　活単元学習（ひまわり学級）
・分科会
低学年部会(1･2 年),中学年部会(3･4 年),高学年部会(5･6 年)
・全体会
研究発表・分科会報告・研究協議・指導助言　等

(２)平成１６年度の研究発表会の開催予定
予定期日　　平成１６年１１月
場　　所　　波佐見町立中央小学校
テ ー マ　　「確かな学力の定着向上を目指した学習指導のあり方」
対　　象　　すべての教職員
目　　的　　３カ年の成果と課題をまとめ、研究発表会を開催し、事業終了後も継続的な実践が可能となるように､次年度への基盤整備を行う。

②研究成果普及のためのＨＰ作成、パンフレット作成等の実績（学校としての創意工夫を含む）及び今後の予定
・ＨＰは作成している。今後は, 内容をさらに充実させることを検討している。
・研究紀要と指導案集を作成し，配布できるように用意している。

③フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績
・これまでの取り組み
(1)学力向上推進協議会(６月４日)で，研究の概要を発表する。
(2)長崎県小学校教育課程研究協議会(７月３１日)全体会で,「研究の歩み」を発表する。

④研究成果の普及活動の成果
○研究発表会において，
・県下各小学校の多数の先生方に，研究授業を参観していただき，多くの指導助言等をいただいた。今後の研究をさらに深めていく上で，大いに参考となった。
○他校等からの視察時，研究の概要・成果等を説明する。また情報交換を行う。
・平成 15 年 11 月 20 日(木)
九重町教育委員会　教育長・教育委員・事務局職員(計６名)来校
・平成 15 年 11 月 26 日(水)
諫早市立上山小学校　研究主任・フロンティアティーチャー来校

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☐１５年度からの新規校　☒１４年度からの継続校

【学校規模】　☐　６学級以下　☐　７～１２学級
☒１３～１８学級　☐１９～２４学級
☐２５学級以上

【指導体制】　☒少人数指導　☒Ｔ．Ｔによる指導
☐一部教科担任制　☐その他

【研究教科】　☐ 国語　☐ 社会　☒ 算数　☐ 理科
☐ 生活　☐ 音楽　☐ 図画工作　☐ 家庭
☐ 体育　☒ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☒ 有　☐ 無